

聖ヨハネホスピス通信

ISSN 0919-0457



NO. 55

2011. 6.20

発行 聖ヨハネホスピス

〒184-8511 東京都小金井市桜町1-2-20 TEL 042-388-2888

巻頭言	池田 順子	…1	ボランティア日誌	齋藤 和夫	…5
研究所だより			22年度寄附金への御礼と使途内訳報告		…5
ホスピス点描	近藤百合子 細倉 道子	…2-3 …4	チャリティーコンサートのおしらせ 「いのちを語る」講演会のおしらせ		…6 …6

巻頭言

多くの尊いいのちを奪い、大きな傷跡を残した大震災から、もう3ヶ月が経ちました。悲しみや苦しみ、これから的生活の不安などの中におられる人々に心よりお見舞いを申し上げます。自然災害と人災の被害の中で、私たちは何ができるのかと、問われる日々です。遠くで、直接災害を体験していない私たちが、声かけをしても、何か空ごとのような感じがします。心に傷を受けた方々と思いを一つにすることは、難しいと思いますが、私たちにできることは、日々の生活の中で、与えられたことを一生懸命生きていくことだと思います。

ここ数年、がんを取り巻く環境は変わってきております。入院患者様も重症化・高齢化しています。治療が終わり、在宅に戻れずやっとホスピスにたどりついた方もいらっしゃいます。核家族のためか、家族間のかかわりが薄くなってきており、ご家族とのかかわり方も変わっています。それに伴い、私達のお手伝いも変化しています。

その中で、わたしたちは皆、患者様・ご家族の苦しみや悲しみを共にするという課題を持ってい

ホスピスコーディネーター 池田 順子

ると思います。身体的な痛みや苦しみは薬などで取れますし、経済的なことはケースワーカーなどが社会資源を使いお手伝いすることができます。しかし、奥深く沈んだような、その方の人格にかかるような痛みや苦しみ・さびしさは、頭では理解できても、心から理解することは難しいと思います。1億の人がいたら1億の苦しみ悲しみがあります。ホスピスで働く私たちは、少しでも患者様・ご家族の痛み・苦しみを共にしたいと思っています。課題があるからこそ、成長もあるのだと思いますが、日々のケアの中で、できることできないことを識別しながら、ホスピスマインドを行っていきたいと思います。その患者様がその人らしく過ごしていただくためにも……。

私たちのホスピスは、幸いにも多くの方々から支えられています。支えられているという安心感がまた、良い仕事をできるのだとお思い、心から感謝しております。

研究所だより ~ ボランティアさんに学ぶホスピスマインド ~

聖ヨハネホスピスケア研究所 近藤 百合子

研究所に勤務して早2年。私の日課は、ホスピスの玄関を入り研究所に続く廊下を歩きながら、ボランティアさんと挨拶を交わすことから始まります。やさしい表情と凛としたお姿に、いつも「今日も一日頑張ろう!」という思いにさせていただいている。

桜町病院でホスピスケアがスタートしたのは1989年4月。当時、病院長であった戸塚元吉先生の「桜町病院にもホスピスを作ろう」という呼びかけに、お知り合いだった作家の重兼芳子さんやシスター岡村（前社会福祉法人聖ヨハネ会事務局長）らが賛同し、スタート1年前から準備が進められ現在に至っています。また「ホスピス運営をボランティアと共にやって行きたい」という戸塚院長の強いご意志に基づき、“チームで働くこと、おしゃべりではないこと、秘密を守れること”を条件にボランティアを募り、準備段階で既に50名集まったというのには驚きました。このように聖ヨハネホスピスにとってボランティアの歴史は長く、その歩みは2000年に発行した『風になって』という聖ヨハネホスピスボランティア10年史に綴られています。その中で、戸塚院長がホスピスにボランティアを位置づけた理由として、「ホスピスでは生き甲斐（QOL）ということを重んじます。また、生命倫理に触れる問題も沢山出てきます。こういう時には一人の医師、一人の看護婦が対応するのではなく、社会全体が対応して、今この人の幸せには何が必要かを考えることが重要です。」（『風になって』より）と述べられており、改めて聖ヨハネホスピスが目指したホスピスケアを再確認した次第です。病人ではなく、一人の人としてその方を支えていくためには、ボランティアの存在は大きいということを私自身も色々な場面で実感してきましたが、今回、ボランティアさんとのかかわりを通して学んだことや感じていることを振り返ってみようと思います。

ホスピスケアには、『チームケア』という大きな柱があります。これは、日本ホスピス緩和ケア協会の理念でも謳われており、患者さんが最期まで自分らしく過ごせるよう可能な限りご希望にお応

えしていく上で、様々な医療スタッフとボランティアが一つのチームを組み、患者さんやご家族へのお手伝いをしていくためのものです。中でもボランティアは、患者さんやご家族に対し医療職にはできない生活面での様々なサポート、また、病院であっても病院っぽくなく、できるだけ自宅で過ごしているような雰囲気や環境を整えるために、ホスピスケアには欠くことのできないチームメンバーです。さらに、ボランティアさんの姿勢から、ケアに携わる者として忘れてはならない、“医療者としてではなく一人の人として患者さんやご家族と向き合う”という基本を学び、医療者の偏った見方・考え方・捉え方などに対し、一般人の目線での貴重な意見を頂くなど、色々な面で助けられています。

現在、聖ヨハネホスピスには、およそ120名のボランティアが登録されており、週1回4時間を基本に、患者さんやご家族にとって穏やかで心地よい生活が過ごせるようバックアップしてくれています。活動内容も多岐に渡り、掃除、花の水替え、庭の手入れ、室内環境の整備、買い物、手芸、喫茶のサービス、押し花の集い…などなど、普通の生活を営む上でとても大切な様々なことを自然な流れの中で、しかもさりげなく活動されており、有難さを実感する毎日です。皆様がもし、ホスピスにお入りになられたとき、「ホッとする」「温かさや落ちついた雰囲気を感じる」などの思いを抱いたならば、それはボランティアさんのお陰といっても過言ではありません。自宅を離れ生活を送らざるを得ない方々にとって、住み心地というものは非常に重要な要素となります。聖ヨハネホスピスのボランティアの理念には『私たち聖ヨハネホスピスのボランティアは、ホスピス理念に共鳴し、その実現のために自らの意志で参加しました。私たちは家族でもない、医療者でもない、普通の人として、他のチームのメンバーと共に、ささやかなお手伝いをしています。』とあり、患者さんやご家族にとって、生活の場にボランティアさんが居てくれることは、病院という限られた環境においても社会とのつながりを感じられたり、維持することにつながります。また、生活に潤いをもたらす

らすだけでなく、その人の日常性を大切にしたお手伝いの幅もより広がります。

先日、ある病室から庭を手入れするボランティアさんの姿が目に入りました。日差しが強く、夏を感じるようなとても暑い日。数人のボランティアさんが麦わら帽子をかぶり、首にはタオルを巻いて、雑草の始末や花の手入れをしていました。まるで自宅の窓から見える庭、あるいはどこかの公園や庭園を眺めているような風景です。患者さんもその風景に目を留め、私たちは穏やかな空間の中で花や木、鳥や土など自然の恵みの有難さを共有しました。このような何気ない日常性が心に豊かさや穏やかさを与えてくれるということを改めて実感したのを覚えています。

当研究所では、ホスピス緩和ケア研修として、毎年、多くの医師や看護師の研修生を受け入れています。研修期間は様々ですが全ての方にボランティア研修を体験して頂きます。白衣を脱ぎ、医療職ではない一般の人としての活動には少々戸惑う人も少なくありません。しかし、多くの方が多忙な日常業務や緊張感から解放され、今の自分を見つめ直す時間にもなっているようです。研修後の感想では「ボランティアさんの姿からやさしさ、温かさを感じた」「ボランティアさんの姿勢はケアする者の基本である」「医療職である前に一人の人として向き合うことが大切」「視野が広がり貴重な体験となった」などが多く聽かれ、ケアの原点を再認識し、初心に戻る機会につなげられて

います。つい最近のことです。ある研修生がボランティア体験中にボランティアさんに連れられ庭の花摘みに行った時のことを話してくれました。その際に伝授された心得！ 摘む時は患者さんの目に映る場所の花は摘まないこと、病室にお尻を向けないこと。また、生ける際には患者さんがどの位置から見てもお花が見えるように生け、人が集まりやすい場所には丈の短い花を選んで生けることなどを教わったそうです。患者さんが病床からいつもどんな思いで庭の花を眺めておられるかを考え、花一つに対しても非常にきめ細やかな心配り、そして何よりも常に患者さん・ご家族の目線を忘れない姿勢に研修生も感動していました。研修生のみならず私たちスタッフは、ボランティアさんたちの誠実な姿勢から“無償の愛”“温かさ”“真心”“思いやり”“労わり”“謙虚さ”“支え合い”など、ホスピスの語源であるホスピタリティニ『おもてなしの心』を学び、ケアに携わる者として欠くことのできない『ホスピスマインド』の大切さを教えていただいている。

これからもチームのスタッフと共に、喜びや悲しみ、苦しみを分かち合い、ボランティアさんからもたくさんのお力を頂きながら、患者さんやご家族の皆様が少しでも有意義な時間を過ごせるようお手伝いしていきたいと思います。

ボランティアの皆さん、これからもよろしくお願い致します。

聖ヨハネホスピスのよりよい運営のためにご支援ください

社会福祉法人聖ヨハネ会は、ホスピスのよりよい運営のために皆様からのご援助をお願いしております。ご援助下さった方々には、今後この通信（年に二回発行）を通して連絡させていただき、ともにホスピスを育てて頂きたいと願っています。一人でも多くの方々がご援助下さることを心よりお願い申し上げます。ご支援の受け入れ口座は以下のとおりです。

銀行振込 三菱東京 UFJ 銀行 小金井支店 NO. 4127570
口座名 社会福祉法人聖ヨハネ会（普通預金）

郵便局振込 口座番号 00190-7-711126
加入者名 社会福祉法人聖ヨハネ会
(振込用紙の通信欄に“ホスピスのために”とご明記ください。)

お問い合わせは…〒184-8511 小金井市桜町1-2-20
社会福祉法人聖ヨハネ会本部事務局 Tel042-384-4403

ホスピス点描

ある日、受け持たせていただいた患者様の入浴介助していた時のこと。

「これをしないと、お風呂に入った気がしないのよ」

その方は軽石を手に、一生懸命足を磨かれました。その後も入浴される時はいつも愛用の小さくなつた軽石を持参され、ご自身でのケアが困難となつてからは何度もお手伝いをさせて頂きました。

私がホスピスで働き始め間もない頃です。

その後数年が経ち、一人の女性が訪ねて来られました。

「母の入院中は、まだ幼くよくわからないままでした。最後にどんな所で生活していたのか知りたくて・・・」

病棟をご案内しながらお風呂でのご様子をお伝えしたところ、「(入浴時、軽石が手放せないのは)家族と親戚の間では知らない人はいないくらいでした。本当に母はここで生活していたんですね」

ホスピス科 師長 細倉 道子

と感慨深そうにおっしゃいました。

入院後も、できるだけそれまでと変わらない生活を続けていただけるよう、どんなに小さなことでも大事にしていきたいと思った出来事でした。

朝の一杯のコーヒーが日課であれば、できる範囲でお手伝いしたいと思います。召し上がる事が大変になった時には、香りだけでも楽しんで頂ければと思います。

そんな時、やはり私達の力だけでは限りがあり、ご家族の協力を願いすることが少なくありません。

それまでの患者様のご様子や、ご家族でなくては分からないちょっとしたことを教えて頂いたり、何よりご家族と過ごす時間はかけがえのないものだと感じるからです。

これからも、患者様やご家族と相談しながら、一日一日を『その人らしく』過ごしていただけるようお手伝いできればと思います。

ボランティア日誌

ボランティア 齋藤 和夫

ボランティアの様々な活動がある中で、今回は隠れた作品「薬の空き箱を利用した小物入れ」作りを紹介します。

最近はティッシュBOXでもオリジナルな物が作られているようですが、当ホスピスの患者さんのお部屋の中にも、隠れた小作品が置かれています。材料はお薬の入っていた使用済みの空き箱と包装紙です。空き箱は大・小いずれか2種類ですが、その箱の内側・外側に綺麗な包装紙（主に使用済みの物を利用します）を貼ってお部屋で使って頂きます。

私が活動を始めた2006年、その時すでにこの「小物入れ」用の箱貼りは5年以上続けられていました。主に火曜日、先輩のN・Sを中心多く箱貼りがされ、患者さんのお部屋に提供されていました。最初は箱に包装紙を貼るだけと、安易に考えてお手伝いを始めたのですが、実は「お部屋に置きたい、自分がもらうならこんな物がい

いな」と思えるよう、一つ一つに心を込め作られていることが分かりました。作られた箱がどのように使われるかは、患者さんの自由です。作る者にとっては、「家には金や銀の器だけでなく、木や土の器もあります。ある物は尊いことに、またある物は卑しいことに用います」と聖書の言葉にあるように、どんな使われ方をされるのか、楽しみでもあります。ある方は「お部屋に伺ったとき、自分の貼った箱を使って頂いていると、何となく嬉しくなります。」と言っていました。

箱貼りには、細やかな気遣いと注意が必要です。まず紙の選定には、個別に色や柄の組み合わせに感性を働かせ、細心の注意を払います。また糊を付けた時に反応する紙質にも配慮、糊の粘度や貼るときのスピードと集中、貼り終わってからの点検・補修・補正など、あたかも芸術品を作成するような作業です。

現在は、火曜日（M・Hさんなど）の人が中心

になってノウハウを引き継いでいますが、曜日には限定せず、どなたでも前述した作品作りの思いをもって作成して頂きたいとおもいます。

終わりにこの箱貼りから教えられることがあります。箱、それ自身では何かをするのではないが、そこにある、患者さんの側に置かれ、用途に従つ

てその役目を果たす。そのような存在として私たちもホスピスで日常活動を喜んでさせて頂きたいと願っています。

平成22年度寄附金への御礼と使途内訳についてのご報告

単位：円

項目	金額	前年比	内訳
平成22年度寄付金 雜 収 入	12,364,670 0		個人寄付金、団体寄付金、
合 計	12,364,670	2,589,555	
平成22年度使途金			独立行政法人福祉医療機構「病院会計繰入」 清掃委託費（次年度より病院負担）、 VOコーディネーター常勤1名人件費他 通信運搬費、印刷費 ボランティア活動備品材料費、さくら会活動補助費 造園委託費、物品費、保険料、雑費
計	12,516,549		
合 計	△151,879		法人本部より繰入

平成22年度も、上記のように皆様から多額のご支援を頂戴しこれを活用させていただきました。本当にありがとうございました。赤字に対しましては、法人本部より繰入、決算とさせていただきました。次年度より、清掃委託費は病院負担となります。

真のホスピスマインド・心のケアを大切に患者さまと関わっていくためにも、ホスピスでしかできない患者様・ご家族への看護とケアに日々努力してまいりたいと思っております。今後とも、何卒ご理解とご協力をお願い致します。

社会福祉法人聖ヨハネ会 事務局

編集後記

- ・日本中が大きな悲しみの中にある今こそ、希望の光を祈り、探し求める日々です。 (I)
- ・政治家を全員引き連れて、あの被災地での国会をぜひともやれないものでしょうか？(怒) (N)
- ・地震以来閉店していた夜のラウンジもようやく再開。いい時間を過ごしたいと思います。 (S)

聖ヨハネホスピスのためのチャリティーコンサート

◇主催：《風の仲間》◇

♪ 茨木のり子と谷川俊太郎をうたう ♪

メゾソプラノ 保多由子 ピアノ 寺嶋陸也

2011年7月1日(金) 武藏野市民文化会館小ホール (開場:18:30／開演:19:00)

全自由席 2,500円

〈曲目〉寺嶋陸也：「道しるべ」～茨木のり子の詩による歌曲集～ (2010年委嘱作品東京初演)

自分の感受性くらい／待つ／木の実／道しるべ／十二月のうた 他

三善 晃：一人は賑やか (茨木のり子) 林 光：歩くうた (谷川俊太郎)

武満 徹：「SONGS」より 死んだ男の残したものは (谷川俊太郎)

※曲目は変更される場合があります。

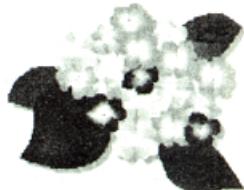
◆収益金はすべて社会福祉法人聖ヨハネ会に寄付され聖ヨハネホスピスのために役立てられます。

チケット申込み方法 (2011年6月20日受付中)

- ①氏名(フリガナ) ②連絡先電話番号 ③チケット枚数 ④金額 を明記し、1～3のいずれかにて申し込み
1. FAX 042-388-0110 下村宛 (申込者のFAX番号明記)
2. 往復葉書 〒184-0005 小金井市桜町1-2-43 下村はるみ宛 (返信用に申込者の住所氏名明記)
3. E-mail hpkazenonakama@yahoo.co.jp (申込者のアドレス明記)

ケアタウン小平&聖ヨハネホスピスケア研究所 主催

「日野原 重明 100歳 いのちを語る」



日時：平成23年12月1日(木) 14:00～16:00 (開場13:30)

会場：武藏野市民文化会館大ホール 全自由席：3,000円 定員：1,300人

- プログラム：
1. 講演 日野原重明先生 (聖路加国際病院 理事長)
2. 対談 日野原先生、山崎章郎医師

☆1～3のいずれかにて申し込み 折り返し、参加費の納入方法をご連絡します。

1) ファックス 2) 郵送 (必ず80円切手をご同封下さい) 3) Eメール

必要事項および、「講演会希望」とご明記下さい。

★必要事項：①お名前(フリガナ) ②郵便番号 ③連絡先ご住所(ご自宅又は勤務先)
④お電話番号/FAX番号(ファックスでお申込みの方は必ず) ⑤ご職業

申込み期限 2011年 11月11日(金)まで ☆定員になり次第締め切り

申込み先：聖ヨハネホスピスケア研究所 講演会受付係

〒184-8511 小金井市桜町1-2-20 TEL 042-380-7820 (平日13時～17時)
FAX 042-380-7826 (24時間)

Eメール : inotiwokataru2011@yahoo.co.jp